

# 「キリスト教神学における象徴主義と図像学」——(その1)

## 1. Dura-Europos

杉 瀬 祐

### 1. 序

この小論は、キリスト教美術、ないしは図像学を考察しつつ、象徴主義ということばを通して、キリスト教的存在論の探究を試みようとするものである。

キリスト教美術、ないしは図像学の起源に関して、またそれへのアプローチに関してはいろいろの論議もあるが、カタコンベなどに見られる「十字」や「魚」や「よき羊飼」などが、一般に最も古い象徴・図像としてあるとすることができる。

注意すべきことは、そこに信仰的解釈と信仰的生活(教団・共同体)が、常にそこに含まれているという点であろう。

「十字」は、単純な図形であるから、キリスト教以前にも各国・各民族においても、さまざまな意味において古くから用いられている。キリスト教の「十字」は本来「錨」を表わすものであり、それがイエスの十字架の磔刑と結びついたのであるが、十字架の贖罪信仰は新約聖書においても明らかのように、原始キリスト教団成立の当初から確立されていたとは言い難く、Q資料にもまだそれは不分明である。イエス・キリストの十字架は一つの謎として、或は踏きの石としてあったが、やがて十字架の贖罪・救済論的意味を明らかにしてゆく教義学的営みを背後に持ちつつ、十字架の図形は次第にそれらの解釈を内包した象徴として用いられるようになってゆく。シンボルとしての十字架が用いられるようになるのは6世紀以降のことである<sup>1)</sup>。

「魚」に関して、ギリシャ語の魚(ΙΧΘΥΣ)という語が、「イエス・キリスト、神の子、救い主」の頭文字を集めたシンボルであることは、改めて言うまでもないが、このような信仰告白が成立するまでには、原始教団の曲折を経た歩みがあった。

Mk. 8:29 「あなたこそキリストです」

Lk. 9:20 「神のキリストです」

Mt. 16:16 「あなたこそ、生ける神の子キリストです」

以上は有名なピリポ・カイザリヤの村々に行く途上でのペテロの信仰告白の箇所であるが、このような例は新約聖書中に枚挙に遑がない。重要なことは、信仰告白の定型化ということは、そう簡単なことではなく、かなりの論議と時間をかけてのみ可能なことであるという事実である。また、反面こうした文字の組合せによる monogram はグノーシスの影響によるものだとされている<sup>2)</sup>。

「よき羊飼」も Mt. 18:12-14 (parallel) や Jn. 1:29-36, 10:1-18, Rev. 5, 6章など

を背後に踏まえていることは言うまでもないが、ダビデ→イエス→メシヤ(キリスト)の系譜はそれほど単純なものではなく、イエスのベツレヘム誕生の伝承 (Mt. 2:5~, Lk. 2:4~, Jn. 7:41~, etc.) やダビデの裔の伝承 (Mt. 1章の系図とマリヤ, Acts 2:29~, 13:36~, Rom. 1:3~, etc.) などには、イエスのメシヤあるいはキリストとしての意味内容にかかわる贖罪理解や終末信仰の諸問題がある。しかし、表面的には、単に失われた小羊を尋ね求める羊飼の愛(神の愛)の表徴として用いられる。

キリスト教が初めて聖書的美術を発明したわけではなく、言うまでもなくユダヤ教の先蹤に倣ったものにすぎない。しかし、ユダヤ教もキリスト教も当時のギリシヤ・ローマ文化の影響を深くうけつつ、古典世界の図像をそのまま、あるいは少し形を変えたままで、自分たちの図像として用いることに関して、ある意味では全く平気であったと言うことができる。前にも触れたが、よく知られているように、小羊を抱いたキリストの姿は田園的牧羊者からとられたものであり、その理念は博愛(Philanthropy や humanitas)の表現としてあり、また死後の理想としても用いられていたものである。弟子たちに囲まれたキリストは哲学者たちの姿から、聖なる者としてのキリストは Helios や Orpheus<sup>3</sup> から、王冠を頂いて玉座に坐るキリストは皇帝の姿からとられたものである。また、旧約聖書や新約聖書からの場面も好んで古典世界の神話との類似が求められた。例えば、Adam の創造と Prometheus, 蔓草の下の Jonah と眠れる Endymion<sup>4</sup>, Samson と Heracles, といった工合に<sup>5</sup>。また、ユダヤ教のラビたちは自らを“Torah の水に生かされている小魚”と考えていたが、Tertullianus は“クリスチャンは、我らの Ichthys, イエス・キリストに従って、洗礼の水の中に生かされている小魚たち”と語った。ユダヤ教徒は Torah から離れては生きてゆけない。同様にキリスト教徒もキリストから離れては生きてゆけない。しかし、洗礼からではない。Tertullianus のこの不器用な応用の仕方は、この話がユダヤ教からの借用、転用であることを暴露していると言われる<sup>6</sup>。ユダヤ教とキリスト教との密接な関係は格別おどろくほどのことではない。旧約聖書は共通の正典であり、両者は同じ根をもつ宗教であるからだ。しかし、魚の食事となると少し複雑になってくる。魚は古代世界では広く永遠の生命のシンボルとされ、従って魚食は神聖な行事、あるいは儀式としてある。これにパンと葡萄酒が加わると、日常生活の生の営みに重ねられて、各宗教それぞれに特有の意味を附加し、特有の儀式となってゆくが、それらが相互に全く無関係にあったわけではなく、互いに影響しあい、互いに利用しながら共存していたわけで、我々は、キリスト教美術誕生の背後にあるこうしたヘレニズム世界の特質——活き活きと並存・混淆し合った当時の状況——にまず十分な注意と関心を払わねばならないであろう。

ここに注目すべき、また驚ろくべき発見がある。それは、初めてキリスト教の新約聖書の物語が壁画として表現された場所である<sup>7</sup>。それは、ユダヤ教とキリスト教のみならず、Zeus の神殿, Bel の神殿, Mithraeum などまでも一緒に共存したまさにヘレニズム世界の象徴とも言うべき場所である。それは、眠れる美女の伝説さながらに1700年間もシリアの砂漠の砂の中に眠り続け、1920年代になって初めて発掘されて目覚めた Dura-Europos であった。

## 2. Dura-Europos の発見

Dura-Europos のことはかねてから耳にはしていたが、1977年から1978年にかけて Yale 大学神学部滞任研究する機会をえて、Prof. John W. Cook の Early Christian Art という seminar で Dura の話をきいたり、Yale 大学の Art Gallery の陳列や The New Haven Jewish Federation と同 Jewish Community Center 共催の展示を見る機会があったり、さらに好都合なことにはその時期に、New York の Metropolitan Museum of Art で世紀の大企画と騒がれた The Age of Spirituality が開催されたため、New Haven から8回以上も通って、いろいろ見学することができた。そうしたことから、少しは以前と変わって関心をもつに到ったのだが、今改めて Dura-Europos について考えてみようとする、あの時にもっと自覚的に研究し確認しておけばよかったと悔やまれてならない次第である。

さて、後に Dura-Europos 発掘の指揮に当たった Yale 大学の Clark Hopkins によれば、発掘の経過は以下の如くである<sup>8)</sup>。

- 1898 Schulz と Sarre, 現場を訪ねる
- 1912 Sarre と Herzfeld, 現場を調べ、ギリシヤ文字の刻銘と壁画の証拠をつかむ
- 1920. 3.30 イギリスの軍隊が絵を発見 (Palmyrene Gods の神殿)
  - 4.23 James Henry Breasted (Chicago 大学の Oriental Institute), 視察の依頼をうける
  - 4.28 Breasted, 視察のため Baghdad を出発
  - 4.29 現場はフランスーシリアの保護地となる (San Remo 協定)
  - 5. 3 Breasted, Konon の絵を見つけ、Dura という町の名を発見
- 1922. 7. 7 Breasted, Dura についての最初の報告を French Academy に送る
  - 10月 Franz Cumont, Academy から Dura の発掘を任命さる
  - 11. 7 Cumont, Palmyrene Gods の神殿、弓隊の塔、角面堡 (Redoubt), 町の中心
  - ~18 部分、墓、Artemis-Nanaia の神殿などの整理を開始、また Europos の名を発見し、Dura と同一であることを確認
- 1923.10. 3 Cumont の第2期、前回の仕事を引続き行う。旅行記録を刻んだ兵士の楯を発見
  - ~11. 7 見
- 1924 公式の発掘行われず、しかし兵士たちがその附近を試掘
- 1925 Rostovtzeff, Yale で本格的発掘計画を樹て始める
- 1926 Syria における Druse 教徒の反乱終結、発掘に支障なし
- 1927 Syria 政府は Yale-French Academy 合同の遠征隊に許可を与う、Pillet 現場視察のため派遣さる

### 第1期

- 1928 2.28 Pillet, 遠征隊指揮者として Beirut に到着
  - 4.13 Pillet, Dura にて第1期調査開始
  - 4.20 Great Gate, 角面堡、砦の整頓、Nemesis の浮彫、皮蔽いの楯などを発見

5. 6 第1期終了

## 第2期

10. 1 Hopkins, Pillet を助けるため Beirut に到着

10.21 発掘隊 Dura に到着

10.25 掘鑿作業, 第2期開始

1929 砦, Roman bath, 塔, Great Gate, Palmyrene Gods の神殿などの整頓作業  
継続, 貯蔵されていた大量の貨幣など発見

2.22 遠征隊新宿舍を公式に開設

3.10 Hopkins, Dura を去る

3.31 第2期終了

## 第3期

10.30 Pillet, 発掘開始

1930. 1.28 Pillet, Aleppo にて入院, 監督は Naudy, Rowell, Walter に委ねる。

~3.27 Artemis の神殿, Atargatis の神殿, 凱旋門, 町壁, Great Gate 近くの Roman bath などの整頓作業, Hadad と Atargatis の浮彫など発見

4. 9 第3期終了

## 第4期

10.31 Pillet, 監督として復帰, 第4期開始, 引続き凱旋門, 荒地の壁, 角面堡宮殿, 商人 Nebuchelus の家, Aphlad 神殿, 広い中庭をもった家, 記録保存所などの整頓作業, Sasanian mural の発見

1931. 3.31 第4期終了, しかし研究員の1部残留

4.29 Palmyrene Gods 神殿から絵を移動させて研究員出発

## 第5期

10. 4 Hopkins, 指揮者を引受けて Beirut に到着

10.26 第5期開始, 記録保存所, 執政官邸, Artemis-Azzanathkona, Agora などの整頓作業, Azzanathkona の浮彫発見

1932. 1.17 家(キリスト教会堂)の中で見つかった壁画の探求

1.18 壁画の発掘, 洗礼盤見つかる

1.19 洗礼堂の凹所(niche)内部の絵及び墓での3人のマリヤの絵

2.12 小さな Roman bath 発見

Great Gate (Synagogue) の囲いの北で壁画の破片発見

2.28 第5期公式には終了するも, 作業は3月から4月まで継続

## 第6期

10月 Hopkins 下旬に発掘再開

礼拝堂, 町の Roman quarter, 砦, Artemis 神殿, Parthian bath, 書記の家などの整頓作業, 鱗型の鎧, 対壕の中の骸骨, 彩色された楯, 勝利の画板など

発見

- 11月 下旬に Synagogue の壁画現れ始む  
12月 家の中の狩や晩餐の飾り絵発見  
1933. 3. 5 Diatessaron 発見

(註. Diatessaron は最古の〈四福音書一覽〉ともいうべき書物。150年頃グノーシス派のタティアノスが四福音書をひとつの連続した物語に編集したもの。早くからシリア語の諸教会で広く用いられ、5世紀まで福音書の規準版とみなされていた。—(以下略)—キリスト教大事典, 教文館, 昭和38年)

3月下旬第6期終了

#### 第7期

- 1933.10月 Hopkins 月末に再開  
Wall Street, Agora 附近, Zeus Kyrios 神殿, Adonis 神殿, Zeus Theos 神殿, Necropolis にある墓などの整頓作業, 彩色された楯, Venus と Cupid の絵など発見  
1934. 1.26 Von Gerkan 周壁の研究を始む  
2月 Mithraeum の発見  
2.23 雨嵐 Synagogue に少し被害を与う  
3月 月末第7期終了

#### 第8期

- 10.30 Hopkins 再開  
初期の Synagogue の遺品, Zeus Kyrios 神殿, Lysias の家, Necropolis にある墓, Bel と Iarhibol 神殿などの整頓作業, 彩色楯3ヶ発見  
1935. 2. 6 Gaddé 神殿発見  
2.20 Hopkins 第8期を終了し, Tigris 河畔の Seleucia での発掘監督を引きうけて Dura を出発

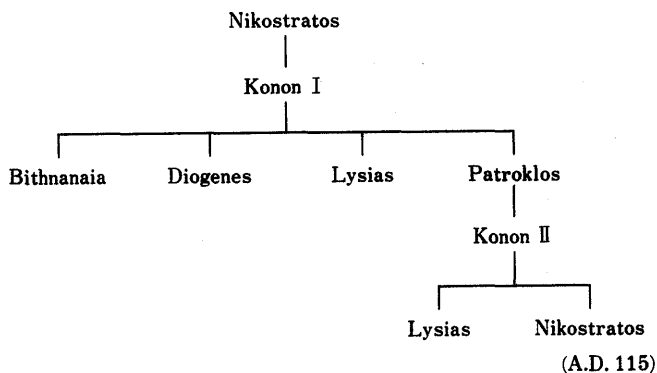
#### 第9期

- 1935~1936 Brown, 監督を受諾。  
引続き Agora, Necropolis, Lysias の家などの整頓作業, Dolicheneum, Dux Ripae 宮殿など発見

#### 第10期

- 1936~1937 作業は Necropolis, Zeus Megistos, Atargatis 神殿, Agora, Redoubt Palace において継続行われる

以上が発掘の記録であるが, 上記の Konon や Lysias などについて, その系図を付記しておく<sup>9)</sup>。



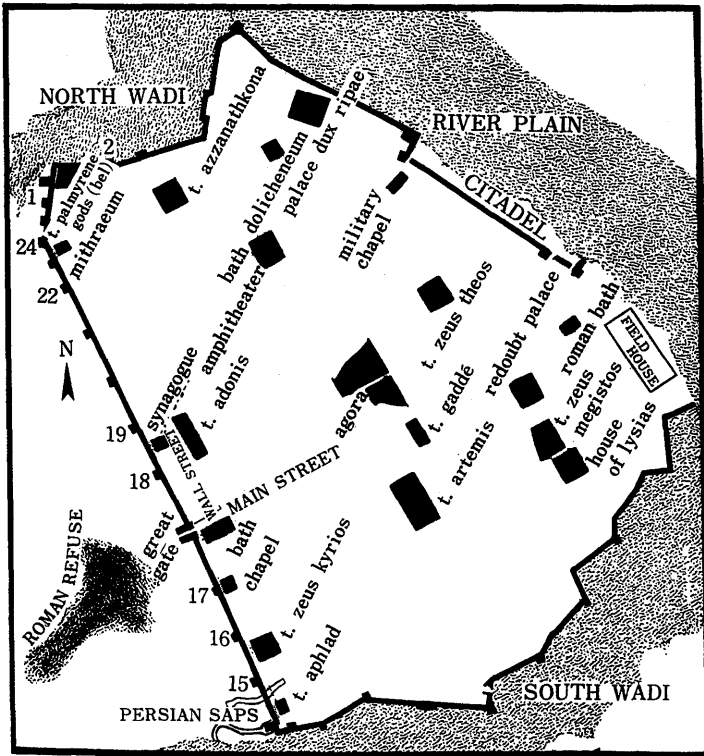
発掘に伴うさまざまな出来事や経緯は Hopkins の書物に詳しいが、我々の主要関心は Dura の Jewish Synagogue と Christian Chapel にあるので、煩雑を避けて省略し、今後必要に応じて他の遺跡、遺品に触れてゆくこととする。1920年から1937年にかけて発掘された Dura-Europos の全容は次頁の通りである。

### 3. Dura-Europos の歴史的背景<sup>(10)</sup>

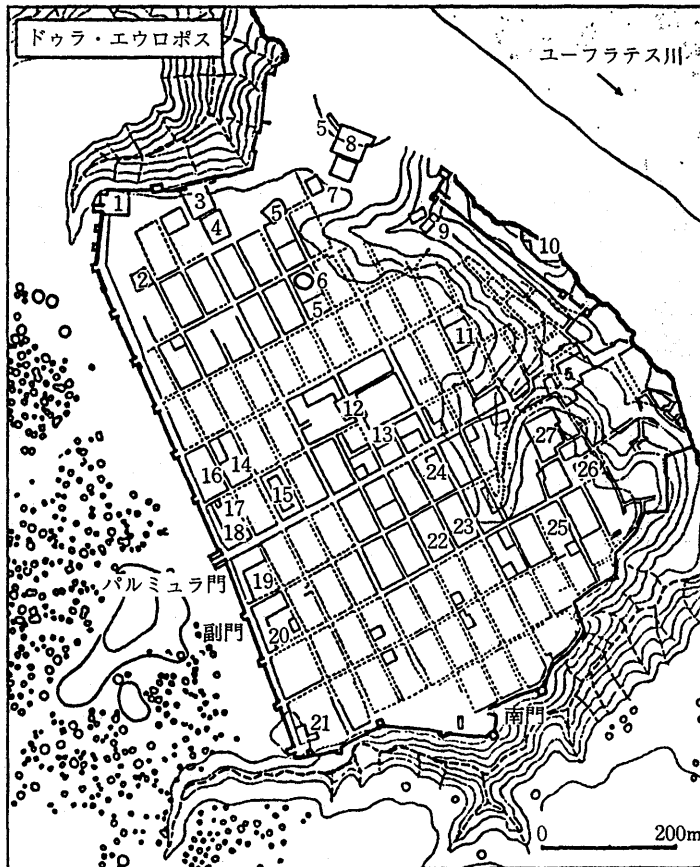
Alexander 大王の東征 (333 B.C.) のあと、Seleucus がマケドニアを治めたが、Seleucus の将軍であったと思われる Nicanor が、退役した兵士たちとバビロニア人の村の近くに 300B.C. 頃作ったマケドニア植民都市がその発端である。Dura というのはバビロニア語で要塞という意味であり、Europos は学者によって意見が分れるところであるが、Seleucus の誕生地を記念してギリシヤ人たちがそう呼んだのか、もっと一般的な意味 (“広大な土地”) で呼んだのか、その点は明瞭ではない。しかし Dura-Europos の名が表すようにマケドニア (ギリシヤ語) とバビロニア (セム族、アラム語) の混在する前哨的要塞であり、ヘレニズム文化浸透の核となった。Dura は Euphrates 西岸の荒地の中の、河の水面より30~40m高い台地の上にあった。河の反対側には肥沃で平坦な平野が広がっているのに、なぜこのような水にも不足するような高台の荒地を選んだのかという疑問に対して、Hopkins は、対岸は Euphrates の氾濫によって泥濘と化する心配もあり、Palmyra や Antioch と結ぶ連絡上からもあえてこの場所を選んだのであって、軍事的目的の重要性を強調している<sup>(11)</sup>。

セレウコス王朝の支配が約200年続いたあと、パルテヤ人 (Indo-Iranian 人) が抬頭して、Dura を支配する。この時代の Dura は隊商ルートの東西の接点として商業殷賑であった。ローマ帝国はその領土に地中海東岸を加えるに従い、国防と貿易の両面から Euphrates 沿いの地方に次第に関心を深めてゆき、A.D. 165 ローマ皇帝 Lucius Verus は、今や弱体化し分裂したパルテヤ王国から、今日のシリア南東部を奪取し、Dura は今度はローマ守備隊駐屯都市 (garrison town) と変ってゆく。

A.D. 220 前後、パルテヤに代るペルシヤの新勢力サザン王朝の次第に加わる脅威に対して、ローマは Dura の守備隊を強化し、砦周辺の改造にのり出したりするが、サザン朝の王 Sha-



Clark Hopkins : The Discovery of Dura-Europos. xx



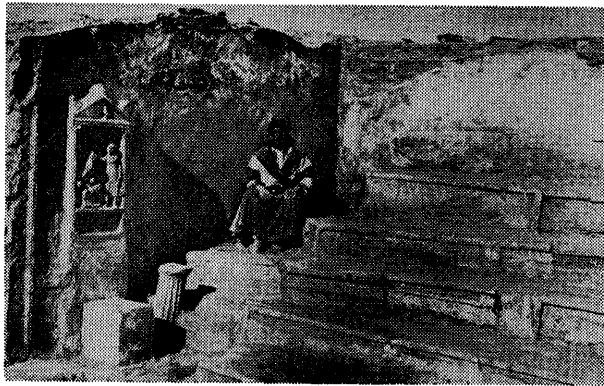
1. ミトラ神殿
2. パルミュラ神殿
3. アツアナトカナ神殿
4. ローマ軍司令部
5. 浴場
6. 円形闘技場
7. ドリケヌム
8. ローマ軍司令官の公館
9. 兵士札拝堂
10. 城砦と宮殿
11. ゼウス・テオス神殿
12. アゴラ
13. 市場
14. アドニス神殿
15. 商店
16. ユダヤ教徒集会堂
17. 書記の家
18. ティケー神殿
19. キリスト教徒集会堂
20. ゼウス・キリオス神殿
21. アフラド神殿
22. アルテミス神殿
23. アタルガティス神殿
24. ガッデ神殿
25. リュシアスの家
26. ゼウス・メギストス神殿
27. ストラテゴスの公館

「世界考古学事典」平凡社

pur I によって Dura は陥落し、廃墟となる。Hagith S. Sivan はその年代を A.D.256 とするが、Hopkins は A.D.253 に Dura は占領され、その時は Dura のローマ守備隊も住民も恭順降伏を誓ったために事なきを得たが、すぐそのあとで反乱を起したために、Shapur I によって見せしめのために A.D.156 徹底的に壊滅させられたのであろう (Rostovtzeff の説) と考える。

Dura-Europos は概略以上のような変遷のあと、1920年に発掘が開始されるまで砂漠の土の中に眠り続けていたわけだが、ヘレニズム文化の支配、パルテヤ人の支配、ローマ守備隊の支配と、約 550 年の間に政治的主権の交替を見ただけでなく、隊商ルートの要地として住民もマケドニヤ人、パルミラ人、シリア人、パルテヤ人、後には帝国各地から来たローマ人のまことに多様な ethnic groups を形成していた。Hopkins によれば、終りのローマ軍支配の時代、公文書はラテン語、一般の会話は上流階級はギリシヤ語、土着のセム族の人々はアラム語やパルミラ語を話し、Synagogue の中ではヘブル語の暗誦が行われたことであろうが、壁画に残る落書きの中にはペーラビ語で書かれたものがあり、Verus 以前の頃からかなりの人数の指導者階級の人々はパルテヤ風の読み書きを相変らず続けていたことを物語っている、という。

Dura に残るさまざまな宗教の神殿・寺院の混在共存には驚ろかされる。古代バビロニヤの武装した女神 Ishtar が女狩人の Artemis やギリシヤの女神 Athena に変り、それに地方名の Nanaia<sup>12</sup> まで伴い、小アジアの Cybele や Magna Mater<sup>13</sup> と深い関係にある砂漠の偉大な女神 Atargatis<sup>14</sup> 崇拝は Dura では根強いものをもっていた。この Atargatis と一緒にいるのは嵐の神、天地の豊饒の神 Hadad である。これらの神殿は明らかに東方型で、マケドニヤ人が



Azzanathkona の神殿  
C. Hopkins: The Discovery of Dura-Europos



Aphlad  
C. Hopkins; The Discovery of Dura-Europos



土地の祭司たちに、どのような神を祭りどのような神殿を建てようと自由にさせた結果だと考えられる。Alexander 自身が Roxane と結婚して模範を示したように、進駐したマケドニアの兵士たちが土地の女性と結婚することは奨励された。マケドニアやギリシヤから妻を伴って来た兵士は極く少数であったであろう。Dura の遺蹟からは多くのギリシヤやマケドニアの男の名は発見されても、女の名は極めて少数にしか過ぎない。最初の頃は Agora の向い側にギリシヤ風の素朴な神殿が建てられて、Artemis や Zeus に捧げられたとしても、時が経つうちに現地妻たちの影響や勢力によって、従来の東方的土地の神々が東方型の神殿に祭られ、それに表面的にギリシヤの神々の名が冠せられていたにすぎないと言うことができる。

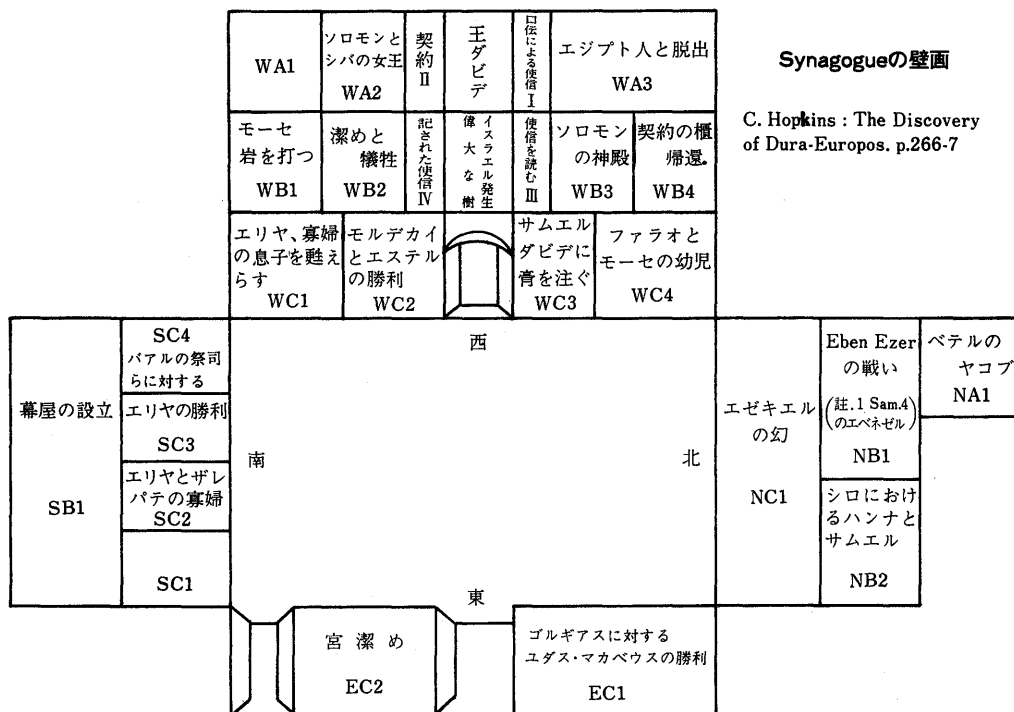
162—121B.C. の40年間に及ぶ内戦で急激にセレウコス王朝は没落し、首都 Seleucia はパルテヤ人によって奪われ、Dura もパルテヤ人の手中に落ちるが、その年代は早ければ 120B.C., 遅ければ 96B.C. であろうと推定されるが、パルテヤ人特有の城砦作りとして、外壁の中に内壁をもった住宅に町を改造する。これは Hatra や Nippur などのパルテヤの都市に例を見るところであるが、その壁に沿って Palmyra の神々や Aphlad<sup>15</sup>, Zeus Kyrios や Azzanathkona<sup>16</sup> などの神々が祭られる。ローマ支配時代の影響は比較的少いように思われる。その理由はローマ守備隊の構成員やその文化的背景の多様性のゆえだけでなく、既にヘレニズム文化の定着と東方的神々の信仰が一般化していたゆえではなかろうかと、私は考える。

さて、そうした町の中にキリスト教の集会所があり、ユダヤ教の Synagogue があり、それぞれに興味深い壁画その他を遺しているのである。我々の関心はここにあるわけであるが、Dura が以上のような東西文化の接点であるだけでなく、複雑に融合した生きた垣塙として、当時のユダヤ教徒やキリスト教徒にどのような衝撃を与え、また彼らに何を考えさせ、どのような信仰理解を与えたのか、を見てゆかねばならない。

上記の Dura の歴史に関しては、主として Clark Hopkins と Hagith S. Sivan<sup>17</sup> の敘述に従って記したが、両者の意見の分れるところは私見を加えて記した。

#### 4. Duraのユダヤ教徒、キリスト教徒、およびヘレニズム文化

Dura の Synagogue は町の西壁に沿って建物が初め個人の家として購入され、それが Synagogue として用いられるようになったもので、恐らく3世紀に入ってからのものであったと考えられる。この最初の Synagogue は小さな集会所 (c. 10.7×5 m) で、壁に沿ったベンチには60人位しか収容できず、婦人たちは恐らく隣の小室で祈っていたものと思われる。この最初の Synagogue の装飾は純粋に幾何学的模様だけで飾られていた。ところが半世紀の間に人数も財力も増していったのであろう、彼らは第2の Synagogue へと拡張工事を行い、聖書的物語の絵画で壁面を飾ることとした。それは A.D. 244~245 の頃と考えられる。結果的には僅か10年あまりしか Dura のユダヤ教徒たちの役に立たなかったことになるが、今日に残るその数多くの絵画は極めて意義深いものである。空間の抽象化、人物や物体の上下左右の並置、奥行や影による立体性は否定されて、人物は正面を向き、かつその大小は重要性に従って描かれていて、描写的ではなく表意的、象徴的である。これは後に中世において展開されてゆく手法であるが、



キリスト教美術の最も初期の手法と一致している点に我々は注目しなければならない<sup>18</sup>。壁画の詳細の検討は後述することとして、Synagogueにおける壁画の位置の概略を見ておきたい。

この壁画については後で改めて詳しく触れるが、それぞれの画についての解釈や表記に関しては、中にはいまだ定説のないものもあるけれども、ここでは Hopkins の a schematic arrangement of the wall paintings をあげておく。Diaspora のユダヤ人は A.D.70年の第1ユダヤ戦争以来、益々その数を増して地中海世界各地に拡ったが、メソポタミア地方には古くからユダヤ人たちが定住しており、また Palmyra の隊商都市としての繁栄、そしてフェニキア系のアフリカ人の最初外人皇帝 Septimius Severus (193—211) 以来「イタリア権をもったローマ植民市」という最も優遇された地位を与えられて経済的・政治的に保護されていたことを思えば<sup>19</sup> (Palmyra は Septimia Zenobia の反乱失敗のため、272年の末か273年の初めに陥落し掠奪破壊された)、ユダヤ人たちがこの Palmyra や近い Dura にも集って来たであろうことは容易に想像できる。そして最初の Synagogue の幾何学的模様の装飾から聖書物語の壁画への大きな変化についても、それだけ Hellenism 化が進み、またペルシヤ文化の影響もあったことが考えられねばならぬであろう。

キリスト教徒の迫害は Nero や Marcus Aurelius その他の皇帝の時にもあったが、最も組織的な大迫害は Decius (249—51) および Valerianus (253—60) の治下に行われたものと言うことができるであろう。そしてそれは偏見や暴徒の煽動などによるものではなくして、ローマ帝国の帝国主義や国家体制とキリスト教の福音信仰が真正面から衝突したことによるものであった。こうした時代背景を考えると、キリスト教徒がどのようにして Dura に集り、礼拝を守っ

ていたのか、ということは甚だ興味深い問題である。Dura のキリスト教礼拝堂は、初め個人の住宅として購入使用され、後にキリスト教礼拝堂として捧げられたもので、南側の2部屋は集会所に当てられ、北西の部屋は礼拝堂になり、そこに洗礼室と聖書の壁画がつけ加えられている建物であって、教会への転用は232年以降のことと考えられるのである。我々はここに屢々耳にしながら見たことのない「家の教会」の実物を発見し、新約聖書から取材した最初の壁画を見、集会においては Tatianos の Diatessaron が用いられていたことを知るのである。Dura のキリスト教徒はラテン語聖書ではなく、ギリシヤ語聖書を用い、そしてシリアで編纂されギリシヤ語で書かれ、ギリシヤ語を話す人々のための Diatessaron を用いていたのである。同様に、ユダヤ教の Synagogue もローマ支配下に建てられたものであるが、Greek-Jewish community によって建てられたものであり、ペルシヤ的というより、もっと正確にはメソポタミヤ的傾向を示していて、ローマ的要素は壁画に描かれている敵兵がローマ兵士の服装をしているくらいで、それ以外には殆んど見当らないことも興味深い<sup>(20)</sup>。

さて、ここに当面する諸問題を2点に集約させて考えておきたいと思う。1つは当時の宗教的状况、即ち具体的にはローマ帝国の宗教に対する態度であり、他の1つは当時の文化的状况、即ち具体的にはユダヤ教徒およびキリスト教徒のヘレニズム文化への対応の仕方である。いづれも極めて大きい問題であり、数多くの異見のあるところであるが、ここでは私の省察の前提となっていることがらのみを述べて、個々別の評価や議論の検討は別の機会に譲りたい。

ローマ帝国は宗教に対しては極めて寛大であったとすることができるし、他面極めて厳格であったとすることができる。何故このような背反矛盾した両面をもつかと言えば、それはローマ帝国の宗教は、個人の靈魂の救いとか内面性を問題にするのではなく、共同体の宗教、国家の宗教であって、祭儀や犠牲を捧げることによって国家の繁栄を勝ち取ろうとするものであったからである。それは体制の宗教と言うこともできよう。ローマ帝国の版図は今や地中海世界に拡がり、さまざまな異民族を包含した一大複合国家であった。それらの民族神は demons で、それらを統べる最高神があり、それは後に太陽神とされるわけだが、ローマ皇帝は諸民族から選ばれて皇帝となり、最高神の代理者としてある。従って諸民族が各自の民族神を信じ崇拜することは自由だが、ローマ帝国に属する限り、各民族神は最高神に仕え、各民族はローマ皇帝に忠誠を尽さねばならない。皇帝礼拝の強要の背後にはそうした論理と仕組みがあった<sup>(21)</sup>。ローマはギリシヤ神話をそのまま継承しオリムポスの山に君臨して神々を支配するゼウス（ユピテル）、あるいはバアル信仰やイシュタル信仰やイシス信仰なども併呑して、それら外来の神々がローマを守護する国家神となるのを拒まない限り、屢々国家神の中に受け入れられた。ローマ皇帝自身は神ではなく、皇帝自身も自らを神としたわけではないが（狂氣的な Caligula などは例外として）、皇帝礼拝は帝国の平和と繁栄を守るための重要な祭儀となっていた。皇帝礼拝を拒否することは帝国への忠誠を拒否することであった。弓削氏が指摘する通り、それは1945年までの日本の国家神道が天皇家族国家理念と結びついて天皇神格化や神社礼拝を一般民衆に強要したことと事態は全く同じであったと言えよう<sup>(22)</sup>。組織的なキリスト教徒迫害はこうして起ったが、それは Plinius（小ブリニウス）と Trajanus 帝の往復書簡に示されているよう

に、キリスト教徒たることに何らかの犯罪が附随しなくとも、キリスト教徒という「名そのもの」が処罰の対象となったのである。即ちキリスト教徒であることが犯罪であったのである<sup>(23)</sup>。

以上は弓削氏の説に従って見て来たわけであるが、弓削氏はこのローマの国家宗教を等価交換の原理によるとされている（国家の繁栄は神々の祝福によるところであり、災厄は犠牲が不足しているからである。繁栄と平和を願うならば全国民が挙って犠牲を捧げねばならない、という神々の恩恵と人間の供犠礼拝が等価として交換される）。私はこの説に反対するわけではないが、旧約聖書においても同様の考えは散見されるのであって、ローマとイスラエルの民の違うところは、旧約聖書においては王も民も共に神の民であり、被造物であって、ローマのような、またイスラエルの近隣諸国のようなヒエラルキーを認めなかった点にあると言うことができるであろう。ではローマにその思想的支柱を与えたものは何かと問えば、古代ローマのゲニウスの思想習慣だけでなく、ネオ・プラトニズムの思想が支柱としてあったのではないかと考えられる。ヘレニズム世界におけるネオ・プラトニズムの汎世界性があるこそ、ローマの国家宗教は成立しえたと言えるであろう。被征服民や植民地の民にとって皇帝崇拝は直接的に彼等の宗教とはなりえなかった。ローマの栄光と繁栄は彼らにとっては悲惨と汚辱であった。「破壊と殺戮と掠奪をかれらはいつわって支配とよび、廃墟をつくったとき彼らはそれを平和とよぶ」<sup>(24)</sup> 状況であって見れば、貨幣に皇帝の像を刻み、神殿に鷲の像を掲げようとしたとき、ユダヤ人が真剣にローマに反抗したのは、単にローマ皇帝を神とすることに反対しただけでなく、ローマの支配体制、そしてさらにその根底に隠されていたものに反対したのだと言える。それを別のことばで表現すれば、ローマの国家宗教は emanation（流出）であり、ユダヤ教やキリスト教は creatio ex nihilo（無からの創造）である根源の対立にあった、と私は考える。等価交換、支配の体制宗教というだけでなく、人や物や cosmos や時間などについての根本的な理解の相違があったと言えよう。

苛酷残忍な永い迫害の末に Constantinus の改宗、そしてキリスト教の国教化ということに至るが、Constantinus のキリスト教改信は太陽神信仰と並行してであり、キリスト教の側でもヘレニズム世界に適合させてヤハウエを最高神、キリストを第2の神とか太陽とよんで教義の説明や弁護を行い、Constantinus は神の代官、神の子ロゴスの似像（Eusebius, カイザリアの司教、歴史家）とまでされて、キリスト教徒自らがこのローマ皇帝を神格化してしまった。そしてドナティスト論争やニケア会議に見られるように、キリスト教本来の信仰問題が、最後的には皇帝の帝國的立場から判断が下され収拾されてしまうという事態に至る。このことはキリスト教の信仰とその図像的表現を見てゆく上でも深い影をおとす重大な問題であろう<sup>(25)</sup>。教会は何か大きなものを見落してしまったのではなからうか。原始教会以来ほそぼそと芽生えかかっていたものの芽がつまれ、無意識に踏みじられて消え去って行ったのではなからうか。

因みに、なぜキリスト教徒のみ迫害されたのかと言えば、ユダヤ教は70年のエルサレム潰滅以後四散して勢力を弱めたことと、主としてユダヤ人のみによる民族宗教として見られたために、迫害の対象とならなかったと言えよう。ユダヤ教も皇帝礼拝に対する反対はキリスト教と同様であり、創造信仰に立つことも同然である。

次に主としてユダヤ教のヘレニズム化の問題を概観する。これもまた非常に大きな問題なので、ここでは主として Erwin R. Goodenough の注目すべき特長ある主張を中心に考えてみたい。E.R. Goodenough ; *Jewish Symbols in the Greco-Roman Period*, 13 vols. Bollingen Series XXXVII, Pantheon Books, 1965 は永年の研究に基づく歴大かつ精緻な著作であるが、この著書の中で彼は Philon を中心にこの問題に考察を加えている。Alexandria の Philon は言うまでもなくキリスト教にも多くの影響を与えたユダヤ人思想家であるが、パレスチナの保守的なラビたちは Philon はじめ他の Diaspora のユダヤ人たちを純粋なユダヤ教徒として認めなかったかも知れないが、Philon や Diaspora のユダヤ人たちは多く自分たちを純粋なユダヤ教徒と自認していた。何故そのような認識の差があったのか。そこには、パレスチナの保守的なラビたちが十分に事態を理解しえなかったヘレニズム世界およびその文化の問題がある。前述したように、ローマ帝国は宗教的・文化的シンクレティズムに対して極めて寛容であったが、同時に政治的・社会的に皇帝崇拜を各民族に強要した。Philon 自身も全権使節として Alexandria のユダヤ人が皇帝礼拝の義務から免除されるよう Rome まで赴いて Caligula 帝に謁見している (39—40)。当時、黙示的、密儀的、グノーシスのなざまざまな傾向が、ラビ中心のユダヤ教の他にも存在した。それでは、まことのユダヤ教の本質は何かと問うならば、Torah (律法) を守り、それに従い、そこに生きることである。(Talmud の Torah と並んでの神聖視はもっと後の時代以後のことである)。Torah の民、聖書の民とは、ユダヤ人が約束 (契約) の民であり、目的・使命をもった民であるということである。広範な地中海世界各地に分散したユダヤ人たちは、それぞれに置かれた状況も違い、負うべき重荷も異なる。しかし、世襲の民 (hereditary group) としてのユダヤ人への忠誠・団結は、どのような状況にあっても、ユダヤ人である限りすべての Diaspora のユダヤ人の守らねばならない行為である。その具体的な行為として、契約の担い手である彼らは、Synagogue に集い、共同墓地を守らねばならない。これは Essenes であろうと Therapeutae であろうと Qumran であろうと、皆同じこれらの基本を守っている。ユダヤ教は、時代や場所で多様であり、儀式も一律でなく、それぞれの地方の宗教的・思想的影響をうけているとしても、このユダヤ教、ユダヤ教徒としての基本はひとつなのである。Philon は『モーセの生涯』の著作の中で、ギリシヤやローマのものは取り上げているが、他の異教は全く無視している。なぜならそれら異教の教えは無価値と考えたからである。それに反して Platon や Pythagoras の教えに意味や価値があるのはモーセの教えの派生・反映であるからである。もっとも純粋かつ根源的なものはモーセに発する、と Philon は信じる。彼の考えは emanation であり、一者からの流出である。彼は Torah に真理が啓示されていることを信じ主張するが、同時に保守的なラビたちに質問する。ではモーセ以前、Torah 以前の Abraham などに対して真理はどのようにして啓示されたのか。これに対してラビたちは、彼らは個人的に特殊な啓示を与えられたのだと。この返答は不十分である。Philon は啓示の4段階を考える、即ち、第1は nomos-logos の段階、神はこれを用いて宇宙創造の原理とされる。人はこの秩序を知りうる筈である。それは Platon が Timaeus で語り、Paul がロマ書の冒頭で語るところの事柄である。だがこれだけでは不十分

である。そこで Philon は独特の段階を作り出す、それはまことの偉大な哲学者にして王なる者たちが自らの「法（真理）の霊的覚知」を人に秘儀的に授け運用させるわけだが、それはまだ言葉となったわけではない。彼らの本質は神性と人性との中間にあり、nomoslogos の受肉者であり、形而上学的な法は今や logikos となる。こうした人物は Platon や Aristoteles の哲学者一王 (nomos empsuchos や lex animata) に当る。こうした受肉者が国を治めれば秩序は回復し、自然万物も整えられ、この哲学者にして王なる者が具体的な法律を制定し、他の者たちはすべてこの法に従わねばならないが、最大の社会への贈物は彼自身の存在である。Philon は、記された法律を超えたこのような Logos-Law をシナイ以前のユダヤの聖者たちに当てはめたのである。しかし、この Logos-Law になる可能性は彼 Philon にもあり、他のユダヤ人にもある。彼はこの "initiation" について語るが、そこには当時の密儀宗教の影響が見られ、この initiation をめぐって儀式（礼拝）が新しい意味を帯びてくる。見えるしるしなくしては見えない恩恵を受け取りうる人は少いからである。Num. 21 : 16—18 や、Ex. 33 : 7—11 を通して彼はこの initiation の神秘について語るが、この彼の思想はあとで Dura の Synagogue やキリスト教会堂の壁画を検討してゆくとき、そこに密接な関係があることを我々は発見するであろう。この initiation あるいは orgia は密儀的な儀式かと言えば、例えばモーセの如き人はこの世界（この世）から離れて究極實在の「暗黒」（永遠の哲学の via negativa）へと至るわけだが、モーセ自身この世のより低い密儀を知らないわけではなく、実際に他の者たちと共に経験もするが、それらは Aaron に委せる。従ってそれらは Aaron の密儀 (the mystery of Aaron) と呼んでおいても差支えないであろう。ただここで一言注意しておく必要があると思われることは、近代の学者が神秘主義とか密儀を非常に漠然とした広義の意味で使うのに反して、Philon やユダヤ人たちにとって、orgia は具体的な宗教体験であったということである。彼らがどのような所謂密儀宗教的な特殊な儀式をもっていたかは不明であるが、Philon も他のユダヤ人たちもユダヤの祭の暦に従って生活をし、それらの儀式を守っていたことは明白なところである。それはヤハウエの救済史的暦である。そうした儀式に参加して、モーセのような「暗黒」への進入、Philon の言うような initiation の体験をした者があるのは当然と言えよう。それに関連して有名な Philon の比喩を付け加えておこう。ヨルダン川の深い溪谷を境にして、兩岸にそれぞれ3つずつ「逃れの町」がある。片岸には George Foot Moore の表現によれば Normative Judaism<sup>26</sup> の町が立っている、即ち第1の町は「～すべからず」といった消極的誠律を表わし、最低の靈魂到達者が悪を行うことを避けるためにここに来る。第2の町は積極的誠律の町でより高い段階。第3は神の慈愛の町で罪人の悔改めに神が応答し給う世界で、G.F. Moore の言によれば co-eternal with the Law and essential for any legalistic system の世界である。さて反対の岸には全く異った世界が展開される。それは神のふたつの代表的力、即ち支配と創造の町、そして第6の町は神の Logos の町、即ち the prime emanation of God himself, the Logos の世界である。そして Philon はこれら3つの町は究局において1という三位一体の論理を展開していることに我々は注意しなければならないであろう。前にも記したが、十戒は世俗に縛られている人に最も単純な形で神の意志・恩恵が伝え

られるものであるが、人生の真の目的は Logos-Law に至ることである、しかしだからと言ってその人間のあいだに高低があるわけではなく、究極的に讃えられるべきものは神なのである。

Philon は Hellenistic Jew として自由広量であったが、同時に厳格・純粋なユダヤ教徒でもあった。ユダヤ教徒として守るべき Torah, Synagogue, ユダヤ人共同墓地などのことは少しも譲歩しなかった。パレスチナのユダヤ人よりも、より積極的に、その信ずるところをその場所、その時代に応じてより明確に、より具体的に実践したのである。。



キリスト教礼拝堂の発掘、右端が洗礼室  
G. Hopkins: The Discovery of Dura-Europos

同様のことを我々は原始キリスト教徒たちの中にも見るであろう。3世紀頃まではユダヤ教とキリスト教との区別はまだ漠然として相互に曖昧であったのではなかろうか、という説は取るに足りない<sup>27</sup>。両者は近親関係にあるだけに、相互に影響しあうところは緊密かつ深いものがあったが、同時に相違を明確に認識し反撥しあうところも大であった。例えば Ebionites はキリストは重要だと考える、何故なら彼はユダヤの預言者たちの預言を証したからだ。キリスト教徒たちは旧約の預言者たちは重要だ、何故なら彼らはキリストを証するからと考える、というように、両者の生きた関係を我々は見誤ってはならないであろう。Mithras を中心とする Mithraism に対する彼らの反撥はきびしかった。それは牡牛を虐殺する Mithras はローマの迫害を意味し、ローマ帝国主義の象徴でもあったからである。そのようにローマの現実のある面に対してはきびしく反撥・拒絶しながらも、しかし同時に前にも記したように、ローマ的なるもの、即ち新プラトン主義や emanation などによる内実的変質が Philon のユダヤ教弁証のようにユダヤ教やキリスト教の内側からも起りつつあったという事態も看過できないであろう。

## 5. キリスト教美術の濫觴

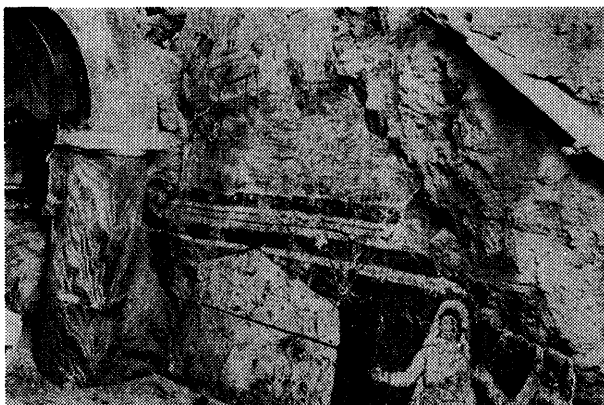
グレコ・ローマン時代のユダヤ教徒やキリスト教徒は syncretism と同時にきびしい権力圧迫の中にあったから、異教の影響に対する警戒と共に、広く他宗教、他文化の特長を摂取利用して自分たちのものを拡充深化させようとする、一見二律背反的な営みを続けていったし、また状況的には相次ぐ迫害の下で極めて不安定・不確実な日々を過していたから、黙示的あるいは神秘主義（密儀宗教）的傾向が強かったことは自然の成りゆきであったと言える。そうした中で改めて問われるのは、自分たちの宗教・信仰の本質・核心とは何かということである。この問いが見落されるならば、忽ちにして syncretism の波の中に巻きこまれ、あるいは迫害の弾圧の下で屏息・棄教してしまわざるをえない。既に見たように Diaspora のユダヤ人たちは、ユダヤ教徒であることの核心を、Torah, 契約の民, Synagogue, そして共同墓地などに見出していた。原始キリスト教徒たちも、自分たちの核心を復活（永生）信仰、聖書、教会（洗礼と聖餐）、墓などに見出していたとすることができる。

モーセの十戒の第2戒に記される偶像禁止の条項も、彫刻の立体像でなければいいとか、霊を吹き込まれたものでなければいいとか、あるいはそれ自体を神格化して礼拝するのではなく単に symbol として用いるだけならいいとか、いろいろの解釈がなされたが、全般的に見ると、ここでも彼らはある面ではかなり厳格に狭く、また他の面ではかなり自由に広く symbol という問題を考えていたように思われる。何故こうした矛盾とも見える態度が出てくるのかと言えば、それは前述の事柄と相通じていると考えられる。

詳細は Dura の壁画群を見てゆく中で検討してゆくが、いまここで私の考えを仮りにまとめるとするならば、それは儀礼と死（永生・復活）の2点に焦点を合せることができるであろう。

キリスト教徒にとって、礼拝は説教（Kerygma）、愛餐であると同時に聖餐式や洗礼式でもあった。それはこの世から来るべき世への密儀的色彩の強い initiation であった。礼拝堂から洗礼堂へと新しい入信者を中心に信者の群が行進する、その周囲に雲の如き多くの信仰の証人たち（Heb. 12:1）が壁画の中から見守っている。彼らは神の時間の中を歩み、この肉に死んで霊に甦えろうとしているのである。キリスト教は神の子の受肉（incarnation）の宗教であり、神の力がイエスの復活という出来事を通していまの時に生き活きと働いている事実を啓示し、信ずる者にはこの世ならぬ永遠の生命と至福を約束する宗教である。ユダヤ教と同じく超現実的であると同時にユダヤ教以上に現実的な宗教であった。従って symbol は単なる表徴ではなく、永遠とこの現世、霊と肉とを結ぶ跳躍板としてあった。Dura や Copt などに残る初期のキリスト教絵画の空間の奥行や影をなくした平面性、そして背景は単純化・抽象化されて人物は正面を向いて二次元的に描かれ、線が強調される、その姿はグレコ・ローマン的な三次元の有機性や自由な運動を失って、静止的に、表面の動きではなく、むしろ内からの意味を語りかけてくる。あるいはまた数人の人物が symmetric に、isocephalic に描かれてリズムを生み出し、対面している場面では両者の間の空間や緊張感が重視されるなど、それは行列を組み蠟燭の灯影の中を沈黙のまま静かに歩みすぎるキリスト教徒を見守る壁画としてはまことにふさわしいものであったと言える。





キリスト教洗礼室の北壁、墓の前の3人のマリヤ、上のパネルにガリラヤ湖上のキリストが描かれている。 C. Hopkins: The Discovery of Dura-Europos

そしていまひとつは初期キリスト教美術の濫觴は葬儀—石棺 (sarcophagus) にあったと言える。最も初期のキリスト教美術の遺物は、石棺、象牙彫刻品、宗教的・世俗の用途の金属容器、彫石に限られている<sup>(28)</sup>。信仰を告白したが、洗礼は受けぬままで 359 年に亡くなったローマ人 Junius Bassus の石棺はそのひとつの好例であろう<sup>(29)</sup>。決して裕福ではなかったと思われる家族が、旧約から新約にかけての一連の物語を刻み、中心には生命に輝く若いイエスがペテロとパウロを従えて坐っている、そのような見事な彫刻をほどこした石棺の中に故人を納めている。そこには故人の復活を希う切なる祈りと家族の確固とした信仰が窺える。またカタコンベに残るさまざまな彫刻、絵、シンボルなどについては改めて言うまでもない。葬式—死—石棺—墓地はキリスト教信仰の核心と深く結びついていた。また、それらは個人として、家族としての極めて自発的な祈りによって生み出されたものである。

Dura に見る壁画の平面性、人物の正面性、対話性など、私には石棺の彫刻と深く関連しているのではないと思われる。石棺の側面に浮彫りにするためには種々の制約がある。その制約は絵の平面性や正面性とも対応するのである。こうした象徴は天地創造以来の過去の旧約の歴史、また故人の生涯の追想であると共に、来るべき終末的救済、また故人の復活の日への希望でもある。礼拝の儀式とこの死者の追想・希望とは互いに扶けあい、影響しあってキリスト教美術を生み出したと考えられるのである。 (未完)

(附記. 本研究は 1983 年度 神戸女学院大学研究所の教員研究助成金によるものです。記して謝意を表します。)

註

1. Albert C. Moore : *Iconography of Religions*. SCM., 1977, p.233  
その他, Donald A. Mackenzie : *The Migration of Symbols*, London, Kegan Paul. Trench, Trubner, Co., Ltd. 1926, Johannes Troyer : *The Cross as Symbol and Ornament*, The Westminster Press, 1961 など参照
2. A. C. Moore, op. cit., p. 232
3. Helios は Helius, Hyperion, Apollo. ローマの Sol, ペルシャの Mithras, カルデヤの Baal, カナンの Moloch, エジプトの Osiris, シリヤの Adonis などと同系列の太陽神(cf, Homer : *Odyssey* xii)  
Orpheus は Apollo と Calliope の子, Eurydice の夫。彼らの蜜月は短く, 毒蛇に咬まれて死んだ Eurydice を取戻すために陰府にまで下る話は有名。
4. Endymion は Zeus と Calyce の子, Elis の王。最も有名な物語は月の女神 Artemis (又は Selene) との恋で, ここでは彼は美しい羊飼いの若者で, 彼は Zeus に願って不老不死の永遠の眠りを与えられ, それによって恋人との甘美な夢をいつまでも楽しむことができた。
5. Kurt Weitzmann ed. : *Age of Spirituality*, Metropolitan Museum of Art, N. Y. 1979, xxiii.
6. Erwin R. Goodenough : *Jewish Symbols in the Greco-Roman Period*, 13 vols. Pantheon Books, N. Y. 1965, vol. 12, p. 99.

このことに関して A. C. Moore は次のように記している。

The fish was already a religious symbol in Judaism and cults of the ancient world. In Christianity it became associated with the sacraments of baptism and communion. A Christian epitaph, c. AD 200, depicts two fishes and an anchor with the words, 'Fish of the living'; the fish suggest the presence of living water, the life-giving source in the New Jerusalem of which baptism is a foretaste in the new life of Christians. Tertullian, an early third-century Latin theologian, wrote :

But we small fishes, thus named after our great Ichthus, Jesus Christ, are born in water and only by remaining in water can we live.

(Tertullian : *On Baptism*, I, 3, cited in Newton and Neil :

*The Christian Faith in Art*, Hodder & Stoughton, 1966, p.31)

A. C. Moore, op. cit., p.232

以上の如く, 両者の引用にはかなりの相違があるので, 念のために原文に当て調べてみたが, 私の管見の及ぶ限りでは, 原文は以下の如くであり, 出典箇所は I, 3ではなくて, I, 1に出ている。

"sed nos pisciculi secundum *ἰχθύν* nostrum Iesum Christum in aqua nascimur, nec aliter quam in aqua permanendo salvi sumus."

(私訳 : されど, 小さき魚たる我らは, 我らの大いなる魚にて在し給うイエス・キリストの如くに, この水の中に我らの生命の始源をもち, またこの水の中に住む限りにおいて, 我らは安全かつ健やかなのである。)

参考 : Ernest Evans : *Q. SEPTIMI FLORENTIS TERTULLIANI*

*DE BAPTISMO LIBER*

*Tertullian's Homily on Baptism*, London, SPCK.

7. *Age of Spirituality*, op. cit., p. 405
8. Clark Hopkins, edited by Bernard Goldman : *The Discovery of Dura-Europos*, Yale University Press, New Haven and London, 1979, xxi-xxiv
9. C. Hopkins, op. cit., p. 16
10. 参考のため C. Hopkins の同時年代表を載せておく。

## Chronology

Monarchs : Hellenistic (H)  
 Roman (R)  
 Parthian (P)  
 Sasanian (S)

Events at Dura	General Events Affecting Dura
B.C.	Seleucid-Macedonian calendar begins : 312/11 Seleucus I (H) : 312-281 Seleucia-on-the-Tigris founded : ca. 306/05
300	Dura-Europos founded ca. 300 : grid plan of city established ; line of city walls set ; Redoubt built ; first Cita- del Palace ; Agora begun
250	Antiochus I (H) : 281-261  Beginning of Parthian dynasty with Arsaces : 247
150	Antiochus IV (P) : 175-164/63 Mithridates I (P) : ca. 171-138 Parthians take Seleucia-on-the-Tigris : 141 Rome makes Asia a province : 130 Mithridates II (P) : ca. 124/23-87
	Citadel wall : 120-65
	Parthians take Dura ca. 113
100	Sulla makes first Roman contact with Parthians : 92 Rome in control of Syria : 63 Parthian lord Suren defeats Crassus at Carrhae : 53
50	Second Citadel Palace Temple of Bel and Iarhibol dedicated in necropolis outside the walls : 33 Dura becomes seat of Parthian provin- cial governor
B.C.	Phraates IV (P) : ca 38/37-2 B.C. Treaty between Rome and Parthia establishing boundaries ; return of Roman standards : 20
	Great Gate begun : 17-16
A.D.	Civil war in Parthia : 39-47
	Temple of Zeus Kyrios : 29 Temple of Atargatis and Hadad : 31 Temple of Artemis-Nanaia begun : 31
50	Vologases I (P) : 51/52-76/77 Nero (R) : 54-68 Parthians defeat Roman general Paetus : 62 Corbulo sent by Nero to check Par- thians : 63 Vespasian (R) : 69-79 Jerusalem falls and is destroyed : 70 Titus (R) : 76-81 Domitian (R) : 81-96 Pacorus II (P) : 76/77-115
	Relief of Aphlad : 54
	Andron dedicated to Aphlad : 54

Events at Dura

General Events Affecting Dura

- |  |  |
|--|--|
| <p>100 Foundation of Temple of Zeus-Theos :<br/>114<br/>Commemoration of Zeus-Bel, Temple<br/>of the Palmyrene Gods : 115<br/>Romans briefly take Dura<br/>Triumphal Arch of Trajan : 116<br/><br/>Parthians again control Dura : ca. 121</p> <p>105 Last stage of Temple of Gaddé, just<br/>prior to 159<br/>Earthquake : 160<br/>Romans under Verus take Dura : 164<br/>First Mithraeum : 168-71<br/>House converted into Synagogue : ca.<br/>165-200</p> <p>200 Roman garrison enlarged : ca. 210<br/>Dura made a Roman colony : ca. 211<br/>Palace of the Dux : post-211<br/>First phase of Dolicheneum : 210/11<br/>Praetorium of Roman camp . 211-17<br/><br/>Heightening of city walls : post-216<br/>House of the Merchant Nebuchelus :<br/>218<br/>Conversion of house into Christian<br/>Chapel : wall paintings : 232-56</p> <p>Grafitto : "Persians descended on us" :<br/>238<br/>Final rebuilding of Mithraeum : ca.<br/>240<br/>New roof on enlarged Synagogue :<br/>243/44<br/>Synagogue paintings : 243/44-253/54</p> <p>250<br/><br/>Last building phase of Dolicheneum :<br/>251<br/>First Sasanian attack and possible<br/>occupation of Dura : 253<br/>First building of embankment : post-<br/>254<br/>Embankment inside city wall enlarged :<br/>256<br/>Sasanian attack and fall of Dura : 256</p> | <p>Trajan begins Parthian campaign : 114<br/>Trajan takes Seleucia-on-the-Tigris :<br/>115/16<br/>Mesopotamia and Syria become Roman<br/>provinces : 116<br/>Death of Trajan : 117<br/>Hadrian (R) 117-38<br/>Jewish revolt suppressed by Rome :<br/>132-35<br/>Antoninus Pius (R) : 138-61<br/>Vologoses IV (P) : ca. 148-92<br/>Rome undertakes war against Parth-<br/>ians : 162<br/>Verus retakes Seleucia-on-the-Tigris :<br/>166<br/><br/>Tatian's Diatessaron : ca. 172<br/>Commodus (R) : 180-92<br/>Septimius Severus (R) : 193-211<br/>Jewish and Christian persecutions by<br/>Septimius Severus : 202<br/>Caracalla (R) : 211-17<br/>Marcus Antoninus (R) : 218-22<br/><br/>Alexander Severus (R) : 222-35<br/>End of Parthian rule : defeat of Ar-<br/>tabanus V(P) by Ardashir (S) : 224<br/>or 226<br/><br/>Beginning of Sasanian dynasty : Ar-<br/>dashir 224 (?) -240/41<br/>Sasanian raid into Syria : 238<br/>Sasanians repulsed at Antioch : 243<br/>Shapur I (S) : 241-72 ?<br/><br/>Decius (R) : 249-51<br/>Organized persecution of Christians :<br/>249-51<br/>Hatra destroyed by Shapur I (S) : ca.<br/>250<br/><br/>Richest period of Palmyra : 261-71<br/>Palmyra falls to Rome : 272</p> |
|--|--|

11. C. Hopkins, op. cit., p. 251-3
12. Nanaia はバルテヤ時代の豊饒の女神で、セム族的 Ishtar と関連があり、Dura では Artemis と同化して Artemis-Nanaia となる。
13. Cybele はフリギヤでの呼名。ローマ神話では Ops, Dindymene, Rhea と同一視される。大地の女神。Magna Mater も Cybele と同じ、神々の母。
14. Atargatis はまた Derketo と呼ばれ、シリアの Hieropolis-Bambyke の豊穡の女神、Hadad の妻、ギリシャ人によって Aphrodite と並置された。Dea Syria (Syria Dea) と同一。Hadad は嵐と雷鳴の神。
15. Aphiad は恐らく Hadad の息子、Euphrates 中域の町 Anath の“偉大な神” Baal。
16. Azzanathkona はセム族の中心的女神、ギリシャ人によって Artemis と並べられる。時には豊穡と戦争の女神。
17. Hagith S. Sivan: The Painting of The Dura-Europos Synagogue. The New Haven Jewish Federation and The New Haven Jewish Community Center, 1978
18. 大系世界の美術第9巻, 「東方キリスト教美術」(柳宗玄), 学研, 1975, p.193, 尚 p.62ff., p. 134ff.
19. 河出書房新社版・世界の歴史5, 『ローマ帝国とキリスト教』(弓削達), 1968, p.390
20. C. Hopkins, op. cit., p. 260
21. 前出『ローマ帝国とキリスト教』p. 320, “さて、属州会議が皇帝礼拝を第一の仕事としたところにみられるように、この時代には皇帝礼拝がしたいに制度化されつつあった。皇帝礼拝のひとつの起源は、ローマ人が古くから家長たる男子の生殖力を意味するゲニウスを、各家の祭壇に祀っていたその習慣であった。ローマ人の考えでは、国家はそれらの家の集合体であったから、その国家の首長たる皇帝のゲニウスもまた祀られ、それを祀る祠は道路の交差点などいたるところにつくられた。皇帝礼拝のもうひとつの起源は、地中海の東部地方で前から行われていた、支配者を神として礼拝する習慣であった。”
22. 前出, 同書 p. 324, 383他
23. 前出, 同書 p. 284 及び Henry Bettenson: Documents of the Christian Church, Oxford U. P. London, 1943
24. 前出『ローマ帝国とキリスト教』p. 339
25. 屢々指摘されるところであるが、原始キリスト教徒は歴史的イエスの肖像に関心をもたず、イエスを死から復活させた神の大能の働らきに関心をもち、イエスはその象徴として、生命に溢れた若い短髪無髯の姿で描かれ、Apollo の如きものとして表現されることが多かった。しかし国教化以後は、長髪有髯の玉座に座し、使徒を膝下に従える皇帝的權威と栄光の姿において描かれるようになる。
26. George Foot Moore: Judaism in the First Centuries of the Christian Era: The Age of the Tannaim. cited in Goodenough, op. cit., p.6
27. 前出『東方キリスト教美術』p. 204
28. ベルザー版 西洋美術史 全12巻, 第4巻『初期キリスト教美術, ビザンティン美術』(イルムガルト=フッター), グラフィック社, 1968, p. 15
29. A.C. Moore, op. cit., p. 237, 240

原稿受理 1984年12月6日